歌との出会い

内海由美子

私が歌と出会ったのは、小学６年生の時。学年にとても歌の上手な子がいた。その子がコーラス部をつくるという。「人数がいるから一緒に入って！」と頼まれて、なんとなく承諾してしまったけれど、別にコーラスがやりたかったわけではなかった。どちらかというと断りきれず・・・そんな感じ。クラブの希望を提出するときになって、急にポートボール部に入りたくなった。でも、コーラスに入るって約束したし。迷いながらも第１希望「ポートボール」、第２希望「コーラス」と書いたことは今も鮮明に覚えている。提出してから、約束したのにどうしよう・・・と少々慌てたが、ポートボール部の希望が多くて、結局私は第２希望の「コーラス部」にまわされていた。約束した手前、この結果にホッとした。

小さい頃からピアノはやっていたし、音楽は嫌いではなかったけれど、とにかく歌がうまいと言われたことは一度もなかった。どちらかというと評価は「音痴」だったかも。母に「人前であんまり歌わないほうがいいよ・・」と言われた記憶があるぐらい。ちなみに母は、歌は苦手ではなかったようだが、父は俗にいう音痴らしく、私はいまだかつて父の歌を聞いたことがない。そんな私がひょんなことから入ってしまったコーラス部。新しく出来たばかりのクラブだったし、人数も 12 人ぐらいだった気がする。ただ顧問の先生は、音大の声楽出身の方だったようで、腹式呼吸など教えてくれた。不器用だが、まじめな私は教わったとおり練習したように思う。

ある日、クラブで「一人ずつ歌ってみて」と先生に言われ、順番に歌った。何を歌ったかは全く覚えていない。でも、歌ったあと「いい声やね。」と生まれて初めて歌をほめられた。「へえ・・そうなんや」意外な気持ちだった。そういえば、最近声がよくでている気がしていたかも・・・。今にして思えば、発声を教えてもらったことでちょっとしたコツをつかんだのだと思う。

歌を専門的にやるようになってわかったことだが、私の声帯は一般的なサイズより大きく、立派（？）らしい。車にたとえるなら、大型車のイメージか。つまりパワーはあるけど、小回りが利かない。それで小さい頃は、その声帯が扱いきれず音程が定まらなかったのではないだろうかと今は思う。

コーラス部では１年間楽しく過ごし、中学へ。なぜか音楽系のクラブに入りたくなくて、バスケットボール部に入った。私に体育会系は似合わないことに気が付いてなかった。もちろん万年補欠だった。中学校生活は私の人生の中で一番やる気のない 3 年間だった。勉強もクラブもすべてにおいて中途半端。自分でもよくわからないが、とにかくパワーがでなかった。

歌に関する思い出といえば、歌の試験ではいつもいい点をもらっていたことぐらい。他はパッとしない生徒だった。ピアノは３歳からしていたが、熱心に練習した記憶は全くない。レッスンの前にちょっと弾いて出かける、そんな生徒だった。でも、長い期間やめずに続けていたので、ピアノ科にいくほどの腕はないが、それなりに弾いていたように思う。

中 3 になって受験の時、ピアノを続けるかどうかの選択を迫られた。なぜかやめたくな

かった。でもこのまま続けていてもピアノを専門に勉強するのは無理だった。「音楽を続けるなら学校の先生になれば」と母が言うのを聞いて、専門的に音楽をやって音楽の教師になろうかなと思うようになった。学校の先生なら教育大の音楽科がいいのでは？と、ピアノの先生にいわれて、漠然と大阪教育大にいきたいと思った。

高校に進学し、私は第１志望を大阪教育大においた。そして受験のためのピアノや声楽、ソルフェージュなどを習いに行くようになった。その頃、大阪教育大は特設音楽課程と小学校音楽（中学校音楽）に分かれていた。特設音楽課程はピアノや声楽など専攻がわかれていて、芸術大学のように専門的な授業も多く、小学校音楽（中学校音楽）は先生になるためのカリキュラムが中心だった。最初教師になることを考えていた私は、中学校音楽を志望しようかと思っていた。特設音楽課程に魅力を感じていたが、ピアノ科は無理だし、自分に専攻できる科目があるとは思えなかったからだ。

しかし、先生に歌を聞いてもらったら「声楽専攻」にいけるかもと言われた。私はそれを聞いて、絶対に声楽をやりたい！と思うようになった。そして希望通り「大阪教育大学特設音楽課程声楽専攻」に入学した。

高校時代は目標があったせいか、勉強も練習も熱心にやった。あいかわらず不器用だったが、地道な努力は苦にならなかった。受験は決して余裕はなかったし、逆に不安だったが、一度連れて行ったもらった教育大の定期演奏会を聞いて、私はどうしてもその舞台に立ちたいと思ったことを今でもはっきり覚えている。

声はというと、技術的には未熟だったが、よく鳴る声帯を神さまから与えていただいたので、特に苦労しなくても声量のある立派な声だった。これが災いして、大学３年のとき、調子が悪くなった。今にして思えば当然なことで、音楽を丁寧につくることもせず、声に頼る歌い方をしていたからだ。

その頃、声楽家を専門に診察してくださる耳鼻科の先生に出会った。私はこの先生にずいぶんと助けていただいた。感謝である。先生に「いい声帯なのに使い方がまずい。発声を変えないと治らない」といわれ、私はあるヴォイストレーナーの先生を紹介していただいた。この先生との出会いがなければ今の私はない。今はもうお亡くなりになられたが、本当に魅力的な方だった。発声はもちろんのこと、物の見方ががらりと変わり、歌うことを見つめなおす機会を得た。それぐらい私には影響力のある方だった。

その後の私は、それまでのように力で押し切るような歌い方ではなく、もっと音楽を感じ、自分を表現することを大切に歌いたいと思うようになった。とは言え、まだまだ技術も考え方も未熟な私はなかなかそうもいかない現実があったが。大学時代、音楽に囲まれていることが本当に幸せだと感じることができた。それがあったからこそ今まで歌ってこられたんだと思う。

ウィーン留学時代、どうしても越えられない壁にぶちあたり、自分の実力のなさを思い知ったことも多々あった。努力しても報われないことも多かった。世界中から集まってくる学生の中には、本当に素晴らしい才能の持ち主も多く、こういう人が世界で活躍していくのだろうと思い知らされた。進むべき道が見えず、もがいたこともあったが、やめたいと思った

ことは一度もないように思う。歌の道は確かに平坦ではなかったが、この歌との出会いがなかったら今の私はどうしていただろう？全く想像もつかない。

今は与えられた賜物をいかし、賛美の歌を歌うこと、これが私の願いである。

（2009 年 12 月）